

1. 基本的立場

マネジメントシステムは、情報を媒体とし、意思決定するための仕組みである。

したがって、コンピューターサイドの役割は、その情報を効率よく処理し、企業活動の活性化を計る事にある。

長期的には、マネジメントシステムを、トータルシステムとして完成させるのが目標であるが、その過渡的段階として、システム化が比較的容易な部分をサブシステムとして完成し、複合化を進める。複合化の究極がトータルシステムである。

2. 投入E f f o r t の程度

投入費用は、システム化による効果の範囲内で考えるのは当然であるが、現実にはその妥当性を証明するのは難しく、高度な判断を待たなければならない。

システム化による効果には、質の向上と省力化があるが、質の向上を定量的にとらえるのは難しいので、省力効果が一つの目安となる。

開発人員については、個別システムに取り組んでいる現状から判断すると、システムの複合化の段階では、相当の人員が必要になると考えられる。

しかし、現実には大幅な増員は考えられないので、現状+ α で進めて行く努力が必要である。

開発期間は、サブシステムとその複合化に、2～3年は必要である。

3. 開発対象

個別システム――本来、トータルシステムの一部として考えられるものであっても、緊急度の高いものは、複合化を意識しないで、ニーズに応え個別に開発する。（現状の延長）

複合化を意識したサブシステム――情報処理の一元化を計り、全社的に業務の効率化を目指すもので、複合化を意識しながら、各サブシステムを

開発する。

サブシステムとして、原価管理、工程管理、品質管理、安全管理、外注管理、労務管理、資機材管理等が考えられる。

4. 導入状況

最近、パソコンの低価格化によって、現場のニーズが顕在化してきた。

実用段階として、現在約20台のパソコン、ミニコンが稼働しているが、そのほとんどが現場計測や日報処理等の個別システムであって、複合化を意識したものではない。

効果については、その限られた範囲内で、十分認められるものが多い。

5. 問題点

マネジメントシステムを開発するにあたって、現状の見直しが必要となるが、机上論と現状の間には、大きな開きがあり、妥協点をどこに置くかが成否の鍵となる。

システム開発における生産性の向上が、大きな課題となっている。

一般的に、開発時のロードが大きければ、システムメンテナンスにおいてもそうである。

開発ロードは、一時的なものであるが、メンテナンスロードは、そのシステムが存在する限り続くものである。

したがって、生産性の向上は、開発ロードよりもメンテナンスロードの軽減のためと言ってもよい程である。

システム開発における生産性を向上させる方法には、どのようなものがあるか検討中であるが、従来行われてきたような改善の延長では、大きな期待は持てないと考えている。